

火星

火星七十五周年記念 平成二十三年二月号



「火星」七十五周年によせて

山尾 玉藻

「ゆきがふるかもつにぶたがないてるわ たまも

両親が揃って俳人という恩恵の中で育った私の六歳の初作です。(中略)
今、このような句集を上梓させて戴くまでに至り、両親から授かった血の濃さを思い、畏怖をさえ覚えていきます。」

これは平成元年に上梓が叶った私の第一句集『唄ひとつ』のあとがきの一部ですが、かなり張り詰めた思いを綴っています。さし迫った思いで自分を懸命に奮い立たせようとしていたのでしょう。しかし今振り返ってみますと、自分が俳句の道を選んだ事の重大さと先々担うべき責務を、当時の私が正しく自覚していたかどうか、少々疑わしく思います。

同八年に主宰を継承させて頂いてからは、「火星」の歴史と伝統を尊びながら、作品と結社の体質に新風を吹き込むべく努力を重ねて参りました。自由闊達な作

品を希求し、古い体質の典型でもあった年功序列を廃止して作品本位の姿勢を貫き、同人会を組織して会計を公に致しました。内部の抵抗が無くはなかったのですが、幸いなことに大方の会員の皆さまのご理解とご協力を得て、伝統に基づく新生「火星」は伸びやかに活動するようになりました。

それから十五年、今では会員の皆さまは私にとってかけがえない同志、仲間と心より思えるようになりました。仲間があつての「火星」であり、「火星」の未来図は仲間と共に描いてこそ指針とする意義があると堅く信じて疑わなくなりました。この心境こそ、今日まで賜ってきた俳縁、俳恩から学ばせて頂いた私の得難い財産と思っております。

「火星」創刊七十五周年を迎え、私に以前のような無理な気負いはなくなりました。周囲への感謝を新たにしつつ「火星」の一層の飛翔を願う快い緊張を覚えるばかりです。

「火星」の仲間の皆さま、今後も「火星」の未来に向かって着実に確実な歩み続けて参りましょう。

七曜抄 (七)

山尾玉藻

沖波の御慶のごとく駈けきたる

枯蘆の風のさらひし御慶かな

網代木のかたへを来たる春著の子

かはせみの失せたる杭も初景色

初売やハイブリッドカー灯まみれに

床上げの男も来たり初句会

山茶花に蕾びつしり寒波くる

葉書数枚書きなにがなし冬籠

地球儀に眼鏡ちかづけ冬籠

綿虫の先に来てゐし石舞台

のめりゆくランナーを追ふ大毛布

枯草に盥の鯉のし吹きたる

川は音ふかくに鎮め冬桜

寒晴や対岸へゆく橋のなく

青空の衰へてきし氷魚網

臘梅の傾ぶき咲ける鯉田かな

旧正の日にめつむれる松の鶏

雨粒のやさしき冬の櫛なり

料峭やだまし絵に水流れる

襦宜が駈け鶏が駈け春あられ



七十五周年記念「圭岳賞」第一席

十三夜

丸山照子



春眠や色鯉の水混みあへる
神の田のいま花影の徒鴉
十五夜を明日に鴨の引きにけり
雨やみし天王山や更衣
雲厚しドアノブ高し避暑ホテル
火の山は霧のしづくす濃あぢさゝ
夏帽子ゆびきりげんまん知り初めし
素通しの風の芝生や避暑ホテル

天領の町に汐の香銀河濃し
病衣着て花野に下りし車椅子
橋の上に白き鳥ゐる野分晴
みよしのの椿象はらふ扇かな
葉園のかかりに残る虫のこゑ
水口へ朴の落葉す十三夜
石鼎の庵のあなた霧襖
石積みて茶の花咲いて深吉野は
まほろばの山また山も神の留守
山の水引きゐる宿の落葉搔
みよしのの外湯戻りの襜褕かな
猪喰うていちばん先に眠りけり

太白星

柳生千枝子

文化の日目覚めていのちある手足
鳥渡るひたぶるに人恋しきとき
木の葉髪日記こまごま書きしるし
梨を剥く独りの夜の雨気配
人力に車夫の名書かれ冬もみぢ
たをたをと来て冬鴉羽畳む
枯松葉辿るに長き時ありぬ

杉浦典子

太りつつ日が山に没る葱畑
川涸るるメタセコイアの影尖り

石段のあれば数へて神の留守
枯菊にとび火しさうな夕日なり
冬うらら棘のある木の名を知らず
冬滝の鼓の音をうしなへる
しぐるるや石の鳥居に石載つて

浜口高子

ぬかるみの猪止めの扉を押しにけり
伐採の音のうねりや神の旅
鉛筆を置くおとひびく暮の秋
台風の外れたり白湯の沸いてをり
赤灯の流れ刈田を曲りゆく
けもの径に拾ふぬくとき椿の実
金剛山の落葉とびくる残り籜

火星作品

山尾玉藻選

鶏頭の頭こづいて歳とつて

大和郡山城

孝子

にほどりに教授マイクを持ち直す
潜く鳩潜き来し鳩冬立てり

茶が咲いて韓のをとこの佳かりけり

吊し柿に日葬儀屋に箱の数

金蠅のいつよりをりし花八つ手

宝塚山本耀子

神留守の打ちし弁慶泣きどころ

裏山の雨はまつすぐ猪の鍋

退院の父が茶の花言ひにけり

歳晚といふ廊の日差しを親しめり

町深く海鳥の飛ぶ神無月

明石戸栗末廣

八つ岳に雲のしかかる莖の桶

夕しぐれ雀のこゑのうつくしき

石段に鳥の声降る七五三
啄木鳥は餌が好きで叩きける
茶の花を覗く垣根の茶が咲いて
白鳥へゆき尽くる道昏れきたる
仰山の柚子や菜つばやおとうと来
風音に覚めて勤勞感謝の日
鯛焼を頬張り歩く昼の月
菊焚きし日暮はこころ足らひけり
風音の夜のかかりを薬喰
雪くるか日野菜の茎のまくれなぬ
砂船のつくる波見て十二月
背表紙の箔のざらつくクリスマス
葛掘が月のよはひを言ひにけり
神留守や夜のうつばりの太々と
足許の濡れてゐるなり菊人形
しぐるるや関帝廟は朱をつくし
蓮枯れて水のちからの抜けぬたる

八幡大山文子

宝塚蘭定かず子

神戸深澤鱻

選のあとに

山尾 玉藻

鶏頭の頭こづいて歳とつて 城 孝子

「鶏頭」は野性味あふれ無骨な生命力を象徴する植物である。「頭こづいて」は言葉を飾らぬこの作者らしい表現であり、「元氣そうやね」とでも言うような親愛の思いが籠められた行為である。その上で、下五「歳とつて」の自己への強い引きつけがあり、この点がこの句の眼目となっている。生命力はものごとの翳りへといつかは繋がっていく。作者はその切なさを敢えて「歳とつて」とぶつきらばうに表したのである。そこが深い。同時発表作へ吊し柿に日葬儀屋に箱の数々は、葬の家に下がる日まみれの吊し柿の淋しさと、葬儀屋の持ち込む道具の箱の賑やかさの対称が非常に際立つ。写生によって二こ世の有情と非情を見事に描いてみせた。

退院の父が茶の花言ひにけり 山本 耀子

贅言をつけくわえる必要はない。父上の静かな喜び、それを傍らで見守る作者の深い慈愛、父上と作者をつつみこむ穏やかな陽光等々、全ては「茶の花」が充分に語っている。同時発表作へ神留守の打ちし弁慶泣きどころは、打ったとこ

ろが「弁慶の泣きどころ」故に、神さまの不在がなんとなく関わっているようで、そこが可笑しい。この作者らしい上品な諧謔がある。

町深く海鳥の飛ぶ神無月 戸栗 末廣

海に面した小さな町を想像する。「町深く」の深くは町の奥深さを示すものではなく、こんなところまでという作者のちよつとした驚きを表することばである。そのような景と季語「神無月」をことさらに意味づける必要はなく、常とは少し異なる景が作者に「神無月」を意識させたという程度に捉えればよい。同時発表作へ夕しぐれ雀のこゑのうつくしき」の平明さがよい。普段は気にも留めない「雀のこゑ」を「うつくしき」とまで感応したのは、「夕しぐれ」の侘しさが作者をナイーブにしたからである。「夕しぐれ」は絶対。

白鳥へゆき尽くる道昏れきたる 大山 文子

作者は今、白鳥たちが生息する湖か池へつづく道を辿っているのだろう。「白鳥」がまだ眼前に見えないだけに、「昏れきたる」には作者の心細さを感じられ、寒さも募ってくるようである。同時発表作へ鯛焼を頬張り歩く昼の月、少々行儀の悪い景が「昼の月」の添景で詩となった。「昼の月」が中七までの興覚めを詩因として高めていて、単なるムード的な添えものではないからである。

恒星巻

加古みちよ

椿の実子に示さむとして崩る
子の拾ふものに石ころ散紅葉
山茶花の道公園へつづく道
母の背のごと十一月の日溜りは
紅葉散る樹下を駅とし縄電車

岡 和 絵

金 澤 明 子

犬矢来もみぢいちまい乗せぬたる
火袋を覗いてゆきぬ冬の蝶
柳散る岸辺に三つ常夜灯
冬日差す伏見港の時計台
返り花肩の力を抜けといふ

中国語行ける小春の渡月橋
紅葉黄葉けふ嵐亭の人となる
手庇の冬日嵯峨野の端にゐて
嵯峨野発つるべ落しの嵐山
お百度を楓紅葉があたたむる

垣 岡 暎 子

坂 口 夫 佐 子

葉掘る地下足袋水に出でにけり
心づもり失せてしまひし菊脛
目も鼻も石にかへりぬ蓼の花
そぞろ寒舟に結べる古タイヤ
走り根に平たくとまる秋の蝶

園児らの笛や太鼓やすがれ菊
冬兆す雲のうしろのうすあかり
公園の遊具まはせり雪婆
かもめらに冬の深空のありにけり
黄落や野外ステージ音あはせ

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

月山の登山口より虎落笛
しぐるるや欄間の近江八景も
枯のなか荒ぶる神へ樽の酒
日のおたる刻過ぎてぬし鳴の淵

西村節子

茶の花に屈めば鳥の発ちにけり
仏手柑に夫を手招きしたりけり
風呂吹や一休禅師横目なり
三門に屯すリユツク冬もみぢ

涼野海音

凧や鞆に入れし求人誌
マンションの最上階の干蒲団
冬帽子津山の空の澄みにけり
疲れたる眼に揺るる花芒

田中文治

夕しぐれ路地に二人の宣教師
鶏鳴の風にのりくる霧の町
高殿よりカリヨンの音や冬薔薇
小春日や奉行所跡の信号機

奥田順子

戻れば湖のまぶしきみかん山
散紅葉堰となりつつ流れつつ
霜柱踏み踏む不登校児かな
鈍いろの藁塚けものめく越路かな

助口もも

夕時雨さつきの鹿の戻り来し
綿虫をまとひ大阪城簞ゆ
砂利船の河岸にきしめる小春かな
屋根低し山脈低し木守柿

笠置早苗

祝の日の雀弾みしお茶の花
小鳥くる石の窪める水呑み場
折り返すらしき宙なる秋あかね
空よりも足もと暗しすがれ虫